分校の実践

「一人ひとりの子どものニーズに応じた授業づくり」

１　はじめに

分校では、平成２１年度から、重度重複障害のある児童を対象にし「重複障害のある子どもの学習づくりと、そのための効果的な教材・教具の開発を行う」の研究に取り組んできた。三か年の計画であったが、より効果的な教材の開発のために四年を費やした。

平成２５年度からは、「発達障害のある子どもの授業づくりと、そのための教材・教具の工夫を行う」という中期目標の実現に向けて、三か年計画で研究することとした。その理由には、近年、分校に発達障害や心身症的な症状がある子どもたちの入院が見られるようになり、適切に対応した授業づくりをする必要性が感じられるようになってきていたためである。

研究の初年度にあたる昨年度は、文献や先行実践例から学び、在籍児童生徒への授業をより良くする方法を検討する予定であった。在籍する児童生徒については、精神科医師や臨床心理士を招いてのケース研究を行いながら、授業への示唆をいただくことができた。しかし、在籍していた子どもが授業実践できないうちに転出したため、分析できる事例には至らなかった。そこで、年度途中からではあるが、「子どもたちのためにできること～いろいろな体験を通して～」というテーマを設定して、取り組みをまとめた。

昨年度の成果としては、学習以外にも外部講師の力を借りながらの楽しい活動に取り組み、病気や入院によるストレスを和らげることができた。また、小児精神科医、臨床心理士の専門家から発達障害や小児の心身症について講演してもらうことができた。その中で、臨床心理士から、分校在籍の児童のケースを踏まえて心身症のメカニズムについて学び、児童生徒の心理状態を知り、保護者の支援の在り方について考えることができたことは有意義であった。

取り組みの成果が見られた一方で、事例研究に対するいくつかの課題も浮き彫りになった。まず、分校の児童生徒の在籍期間である。児童生徒は、入院治療で分校に転入して学習するため、一か月程度の短期から年度をまたぐ長期までと様々であることや、ほとんどの転出入が年度途中になることから、年度当初から計画的に事例研究に取り組むことができにくい状況がある。そのうえ、児童生徒の中には、入院するまでに、もしくは入院したことで学習への意欲が乏しくなり、授業が成立しなくなるなど、継続的な事例研究につながらない状況の子どももいる。また、医療関係者（医師や看護師、理学療法士等）との情報の共有が必要であるが、それぞれの立場での考えを尊重しながらすり合わせていくことの難しい現状がある。

そこで、今年度の研究を進めるにあたっては、目標は引き続き「発達障害のある子どもの授業づくりと、そのための教材・教具の工夫を行う」を研究することとして、授業改善に取り組むことにした。テーマには、「一人ひとりの子どものニーズに応じた授業づくり」を掲げ、個々の児童生徒のニーズにあった授業を展開していくための支援方法について研究することで、発達障害のある児童生徒及びその傾向にある児童生徒を含めて、一人ひとりがわかりやすく主体的に学べる授業づくりにつながると考えた。

２　本年度の取り組み

今年度は、「一人ひとりの子どものニーズに応じた授業づくり」をテーマに研究するにあたって、入院中である児童生徒の病状や心理を理解したより良い支援を目指して、「外部講師による研修」、「周知会及びケース研」、「平成２６年度高知県特別支援学校教育課程研究集会（病弱部会）における発表」、「研究授業」の４つの柱で取り組んだ。

（１）外部講師による研修

ア　「感染予防研修会」４月１６日

例年、小児科病棟看護師長を講師に招いて分校にて研修会を行ってきたが、今年度は、師長の勧めで病院が開催している看護師を対象とした研修会に分校の教職員が参加でき、実技を伴う研究会により感染予防についての知識を得ることができた。

イ　「いじめ、児童虐待等への対応」６月２７日

本校のスクールカウンセラーである光畑知佐子氏の講演により、いじめを防止するには、「人を人として思いやる心を育むこと」、「人と人との信頼関係を持つことの必要性」を再認識することとなった。

ウ　「慢性疾患等の病気の治療及び予後について」１０月２３日

あけぼの小児クリニック医師　石本浩市氏に来校してもらい、小児がんの治療と予後について、「小児がんの子どもとその保護者をどのように支援していくのか」等について学んだ。

エ　「病気の子ども及び保護者の心理的ケア」「いじめ・児童虐待について」１０月３０日

昨年度に引き続き、公立大学法人高知工科大学准教授　池雅之氏を招いた。いじめの定義について再度確認し、いじめの認知件数の推移や発生率等を知ることができた。いじめを受けた子どもたちの心理的不安な状況に対する支援方法や、個々の子どものニーズに合わせてできることから実施することの大切さを学んだ。また、虐待を受けた子どもたちの心理的不安な状況（優しくされたり、寄り添われたりするのが怖い等）についても理解することができた。

オ　「ICT 機器の研修」６月２０日、９月１８日、２月１２日

国立特別支援教育総合研究所教育情報部特別支援教育情報・教育支援機器担当　金森克浩氏に今年度も３回来校してもらった。生徒の実態に合った ICT 機器やアプリケーション等の教材を紹介してもらい、授業に取り入れることができた。

カ　「思春期いのちの教育」１２月１９日

高知県看護協会助産師職能委員会　森本雅子氏を講師に、児童生徒および保護者を対象として、生まれること、生きること、体の学習（血液等）、思春期の体の変化等について話していただき、命の大切さ学ぶことができた。

キ　「インターネットの安心安全な使い方～子どもたちをネット社会の被害者にも加害者にもしないために～」１月１３日

ｅーネットキャラバンの制度を利用して、ｅネットあんしん講座：講師　ＮＰＯ法人イーエルダー　民本博利氏に来てもらい、保護者と教職員で研修を受けた。子どもたちをインターネットの危険から守るために気をつけること、ネット社会のトラブル及びその予防と対応について等、スライドを見ながら学ぶことができた。

（２）周知会及びケース研

年度当初および児童生徒の転入時には、周知会を開き、全教職員で児童生徒の疾患や病状、性格及び普段の生活の様子、学習状況、支援にあたってのポイント等について実態把握をし、共通理解を図っている。また、必要に応じてケース研をもち、適切な支援の仕方について全員で考えるようにしている。

（３）平成２６年度高知県特別支援学校教育課程研究集会（病弱部会）における発表

今年度の研究主題は、「児童又は生徒の病弱・身体虚弱の状態等を考慮して、目標を効果的に実現する教育課程の編成と実施について～これからの病弱虚弱教育における自立活動の充実をめざして～」であった。分校における自立活動は、自立活動の時間における取り組み（週１時間）と、学校生活全体で取り組むものがある。そのため、研究実践発表をするにあたり、分校の取り組み全体をまとめ、発表した。

（４）研究授業

分校の教育課程は、小中学校に準じた「類型Ⅰ型」と、自立活動を主とした「類型Ⅱ型」の二つである。

教員４名全員が、類型Ⅰ型、類型Ⅱ型の児童生徒を対象に各１回ずつ研究授業を実施した。

ア　小学部の取り組み

本年度の小学部在籍児童は、全員が類型Ⅰ型であった。また、治療のために病室から出られず治療内容や体調によって継続的に授業を受けることができない児童と、登校して授業はできるが入院期間が短期で授業を受ける期間も短い児童との大きく二つに分かれたため、研究授業を行う計画はしていても研究授業を実行することが難しかった。

２学期になって、ようやく６年生の児童１名Ａが継続して登校できる状況になったため、小学部の教員２名で国語と算数の研究授業を行うこととした。

（ア）国語

国語は、標準的な指導計画では２時間扱いの計画となっている「言葉の由来に関心をもとう」で実施した。漢字の学習について既習しているということもあり、１時間扱いで計画し実施した。授業の中に児童の興味関心のある内容の新聞記事も取

り入れた。しかし、本児に和語、漢語、外来語についての基礎的な理解をさせることが不十分であったため、応用問題の練習をするまでには至らず、結果として１時間の指導計画では無理があった。

研究授業後の協議で以下のような意見が出された。

・Ａが興味を持てる記事から語を選ばせたことで、意欲的に学習に取り組んでいた。
・語を選ぶ時間や個数を制限したらよかった。
・和語、漢語、外来語についての基礎的な理解が不十分な展開になっていた。
・学習の基本となることの理解が不十分であるとわかった時点で基本をじっくりした方が良かった。
・Ａにも学習の見通しが持ちにくいので、途中で学習内容の変更を提示したほうが良かった。

（イ）算数

算数は、Ａがじっくりと考えて問題を解くのではないかと予想し、本時は、「体積の求め方を考えよう　～角柱と円柱の体積～」の中の「三角柱の体積の求め方」のみを標準的な指導計画通りに実施した。しかし、解答について見返しをする等しても時間的に余裕ができたので、教科書の補充の問題やドリルを解いたりすることで対応した。

研究授業後の協議で以下のような意見が出された。

・自分たちで作った四角柱や三角柱等の模型を提示しいていたのが良かった。
・一対一の学習であるため、教科書には出ていないような少し難しい問題にも挑戦させてみたり、理解ができると分かればどんどん進めたりすることができるのではないか。
・計画の段階から、指導内容をもっと多く設定するべきであった。

（ウ）今後の取組

国語、算数ともに、本児の実態の把握が的確にできていなかったことや、予定をしていた指導計画どおりに授業展開ができないと気づいた時、いかに臨機応変に対応できるような力量を持つことの必要性を痛感した。そのためには、いくつかの授業展開ができる教材準備を丁寧に行うよう取り組みたい。

イ　中学部の取り組み

（ア）類型Ⅰ型

今年度の中学部は、１学期に在籍した生徒１名と２学期前半に転入した生徒２名のうち１名が病室学習のため研究授業を行うことができなかった。もう１名は入院期間が短かったため、研究授業の計画を立てることができなかった。結局、２学期後半に転入し、毎日、登校することができる２年生の生徒Ｂを対象に国語と英語の研究授業を行うこととなった。

Ｂは、年度途中に短期間の在籍であるため、前籍校と学習の進度について綿密に

連絡を取り合って取り組んだ。

○　国語

国語の研究授業では、品詞の分類等の文法における基礎的な学習は既習していることを前提として、本時は、「分法の窓―３　助詞」で助詞の使い方を学習する計画を実施した。しかし、実際は、品詞の分類等の力が定着していなかったため、Ｂが混乱している様子が見られた。

研究授業後の協議で以下のような意見が出された。

・導入時のトムとジェリーの絵を使用したことは良かった。
・絵の使い方が効果的でなかったため、助詞の使い方によって主語・述語の関係が変わることをうまく説明できていなかった。
・効果的に絵が使えたら、助詞の使い方で両者の関係性が変わるということを強調できたと思う。
・理解が難しいと感じた時点で板書の活用や、助詞の使い方の大切さをカードや具体物を使用して分かりやすく説明する等の工夫がほしかった。
・授業者が、発問に対するＢの発言を取り上げることなく授業を進めていたところがあった点も見直すべきである。

○　英語

Ｂは、英語に対して苦手意識があったが、分校の授業は一対一ということもあり、分からないところを自ら質問し、大きな声で音読する様子が見られた。そこで、本単元では、授業を「単語テスト５問→教科書の本文の音読→イラスト等を見て There is/ are~.で表現して書く→前籍校の英語のワークに取り組む」という一定の流れとし、Ｂが主体的に活動できるように構成した。

研究授業後の協議で以下のような意見が出された。

・Ｂが集中して学習に取り組んでいる姿をから、フラッシュカードを使用し、使い方もバリエーションに富んでいて良かった。
・カードの形や大きさを揃えたり、種類によって色分けしたりする等の工夫をするとなお良い。
・正しい発音を定着させるためにチャット等をしてみてはどうか。
・シャドーイングが良かった。
・毎時間同じような構成で進める授業とするよりも、授業の中で本時に学習してほしいことを明確にし、授業の中でより集中力を高める山場を作るような展開の仕方にしても良いのではないか。
・正しい発音を身につけるために、一つ一つの単語の発音を丁寧に発音して聞かせたり、繰り返し発音させたりしながら、英語の語彙力を高めるような授業にしていく必要がある。

○　今後の取組

今後は、プリント教材やフラッシュカードの活用、工夫をしていきたい。

Ｂは、英単語や漢字、古文の音読等、何度も繰り返し学習することで定着が見られるため、今後、朝の会等でも漢字や英単語の小テスト、古文の音読等にも取り組みたい。分校では、一対一の授業であるからこそＢが安心して発言できていたと考えられる。病状が安定し退院したのち、前籍校の大きい集団に戻っても気後れすることなく学習に意欲的に取り組むことができるよう、基礎学力の定着と学習の仕方を身につけさせ、自信を持たせるように指導していきたい。

（イ）類型Ⅱ型

○　ICT 機器の導入の経緯

中学部には、自立活動を主とする教育課程：類型Ⅱ型の生徒Ｃが在籍している。Ｃは、神経系の疾患のため生後３か月から入院し、小学部を経て現在中学部１年生になっている。人工呼吸器を装着している等の病状から、授業は主に病室で行っている。病室から出る機会が少ないため、家族やＣを担当する医療関係者以外の人と接する機会が極端に少ないのが現状である。

Ｃの授業に関する打ち合わせや現在の病状の確認については、月１回、分校の全教職員で会をもち、共通理解を図るとともに、研究授業を各教員が年間１回行ってきた。また、主治医や担当看護師、リハビリテーション部の OT(作業療法士)、PT（理学療法士）、ST（言語聴覚士）との連携を密にし、学校での取り組みの様子を伝えている。

Ｃが小学部に入学して以来、国立特別支援教育総合研究所教育情報部特別支援教育情報・教育支援機器担当（現独立行政法人国立特別支援教育総合研究所教育情報部統括支援員総合特別支援教育情報担当）の金森克浩氏の助言を受け、PPS スイッチを使ってパソコンやレッツチャット、iPad 等の支援機器を活用した授業に取り組んできた。

PPS スイッチとは、パシィフィックサプライ株式会社のピエゾニューマティックセンサースイッチのことであり、圧電素子（ピエゾ）と空圧（ニューマティック）の２種類のセンサーを選択できるスイッチのことである。ピエゾは、「ひずみ」や「ゆがみ」を感知することにより、信号出力を行うセンサーで、センサー部を身体の任意箇所に医療用テープで貼り付けて使用するもので、ニューマティックは、センサー部のエアバッグを触れることで反応するセンサーであり、わずかな力で操作が可能となっている。どちらも、感度調節が可能なため、様々な身体状況の人に使用でき、誤作動防止装置がついている。

Ｃが、金森氏のアドバイスを受けてこれらのピエゾスイッチを使用し始めたのは、ワンクリックの操作でおもちゃを動かすことを始めた小学部２年生の時であった。右足首の少し上にセンサーを貼り付けて、３年生からはパソコンに入れている画像のスライドショーを見ることも始めた。その後、４年生からは、センサーを貼り付ける位置を右手首の内側に変更し、新たにレッツチャットの操作も始めた。

レッツチャットとは、パナソニックエイジフリーライフテック株式会社の意思伝達装置のことである。言語および上肢の両方に障害をある人に適した、スイッ

チで操作する意思伝達装置で、周囲とのコミュニケーションが困難な人も身体のわずかでも動くところを使って家族や友人、介助者等に要望や意思を伝える等、日常のコミュニケーションを行うことができる機器である。

レッツチャットに取り組むことにより、平仮名５０音を覚え、日常生活でよく耳にすることばや､人やものの名前を文字で確認することもできるようになった。そして、レッツチャットの画面からことばを選んで、人に伝えたい気持ちを表出する様子が見られるようになった。そこで、レッツチャットをプリンターに接続して、手紙を書くことにも挑戦した。しかし、レッツチャットの画面から、ことばを選択するとき、どうしてもうまく選べないことが多いため、５年生からセンサーをニューマティックに変更してみたところ、ミスタッチなく入力ができるようになった。

今年度は、金森氏だけでなく病棟リハビリテーション部の OT とも連携し、将来的に病状が進行してＣが自分で動かせる筋肉がまぶたや視線のみになった場合を考慮して、瞬きをすることで操作できる OAK を授業に取り入れることを新たに試みた。

OAK とは、Observation and Access with Kinect の略である。東京大学先端科学技術研究センターと日本マイクロソフト社との共同開発品であり、マイクロソフト社の「Kinect for Windows（以下、キネクト)」を利用して、カメラで対象者の体の動きを観察し、その動きをとらえてスイッチ操作を行うことができるスイッチソフトウェアである。体の動きに困難がある人の能動的な活動を支援することを目的としており、重い障害がある人の任意の動きをキネクトセンサーで検出し、スイッチ操作を行うことができる仕組みとなっている。Ｃが、まぶたを動かす=瞬きをすることで、パソコン内のパワーポイント教材のスライドショーを操作して好きな画像を見たり､iPad 内のゲームのアプリケーションを楽しんだりできるように、OAK を授業の中に取り入れることを試みた。

○　自立活動

Ｃの授業は、小学部入学以来分校の全教職員で担当してきた。教職員それぞれにアプローチの仕方が違っても、Ｃとのコミュニケーションを大事にしながら、自分の気持ちを何らかの方法で表現でき、他者と気持ちを伝え合うことができるようになってほしいと願い、授業内容を工夫してきた。

Ｃは、目で意思表示をすることができだした。YES の時は、連続２回の瞬き、NO の時は、瞬きをしない、嫌な時や拒否の時は、白目をする、感動や喜びの時は、瞬きを連続させる、おどけているときは眼球をくるくる回す等、自分の気持ちを目やまぶたの動きで表現していることが分かってきた。しかし、Ｃの真意を探るためには、聞く側の聞き方にも工夫が必要である。Ｃが考えていること、好きなもの、したいこと、欲しいもの等々、自ら発信できるようになってほしいと考え、これまで色々な支援機器を授業に取り入れてきた。

しかし、Ｃの病気は筋力が低下していく進行性であるため、今、確実な操作ができている PPS スイッチも、やがて操作ができなくなる日が来るかもしれない。

将来を見据えて今からOAKの練習をしておいてはどうかと金森氏および病棟のOTから指摘があった。そこで、2学期から、OAKを週1回リハビリテーション部から借用し、興味のある画像を瞬きで操作して見たり、アプリケーションのゲームを楽しんだり、簡単な絵本を読んだりする活動を授業に取り入れることとした。

今回の研究授業は、OAKを使った授業を実施した。

研究授業後の協議で以下のような意見が出された。

・出席シールの選択の場面で、「犬ですか？（犬のシールは二枚）」「雪だるまです？ちがう、じゃあこれやね」と選択肢の挙げ方がよかった。一枚一枚について聞くのではなくて、何が良いのか考えていた。
・気持ちを聞く時も、ボードを四分割にして上手に選択肢を設定していたのが良かった。
・見たくなる教材づくりが良くできていた。
・毎回教材を作ることは、大変であろう。
・瞬きによるスイッチ操作（OKA）がミスなくできていた。
・お礼の手紙を書きたくないのは、昨年と同じでかわってないなぁ…と思った。「御礼、お返しをする」ことをどう教えて行けばよいのか悩む。
・本生徒が興味を持つような教材を作っていたので、OAKの操作を楽しみながらすることができていた。
・指導案に活動の中身がもう少し詳しく書かれていると良かった。

○　今後の取組

取り組みの当初は、目新しいことに焦ったり、喜んだりして瞬きを連続させる様子が見られたが、やがて、画面上の文を読んでから次のページに進む等、確実な操作ができるようになった。

現在、Cは、PPSスイッチを使ってパソコン、レッツチャット、iPad、電動はさみ等の操作が上手にできており、瞬きでOAKを操作する新しい取り組みもすぐにできるようになったことから、Cの理解力の高さを実感できた。

また、我々は、Cの意思を確認するために、いくつかの選択肢を提示し、その中から自分の気持ちに一番合うものを選ぶように指導してきた。最初は、二者択一から始め、徐々に選択肢を多くしてきたが、今回の研究授業では、授業の終わりにカレンダーのシールを貼る場面で、Cの認識力の新たな一面を見ることができた。シールを選択させる時、通常は、「この中にありますか？」や「どれにしますか？」と聞いて選ばせるのだが、今回の授業者は、「それは、人間ですか？動物ですか？」「一人で写っているものですか？何人かが映っていますか？」等の聞き方で選択肢の中から焦点をしぼっていく選ばせ方をしていた。Cは、授業者の問いかけに的確に瞬きで答え、自分でシールを選択することができていた。発語がないため認知能力の程度を明らかにすることはできていないが、確かに概念的なものが育っていることを実感できた授業であった。この研究授業により、Cに対する発問の仕方について見直すきっかけができ、各自が次の授業の際に活かすこ

とができた。

Ｃは、PPS スイッチの操作も上手にできていることから、まだ、全てを OAK に切り替えなければならない時期ではないと思われる。今後も、ことばの意味を理解して使える語彙を増やすこと、数の概念を育てること、中学生になり興味を持っている漢字や英語を学習に取り入れていくこと等、Ｃの学習意欲が高まる教材を常に模索し工夫しながら、授業を展開していきたいと考えている。

３　成果と課題

（１）外部講師による研修

研修の成果としては、感染予防から病気治療中の児童生徒と保護者の心理的ケア、ICT 機器、インターネット等の多岐に渡って研修を受けたことで教職員の指導力の向上につながっていると考える。また、講師の中には、昨年に引き続き研修を引き受けてくださった方もおり、分校の状況を理解してくれたうえでの充実した研修ができた。さらに、小児病棟看護師長により看護師を対象とした研修に参加できるよう計らってもらえるなど、研修会の機会も増えてきている。

課題としては、研修会の機会や引き続きお願いできる講師ができた半面、教職員の資質向上のために講師開拓が必要である。

（２）周知会及びケース研

成果としては、児童生徒の実態を教職員全員で的確に把握した対応につながっていると考える。

課題としては、児童生徒の実態を的確に把握するため、関係機関とのさらなる連携を図っていく必要がある。

（３）平成２６年度高知県特別支援学校教育課程研究集会（病弱部会）における発表

成果としては、分校の教育活動全般のまとめができ、日々の教育活動においてできている面と努力が必要な面を確認でき、見直すきっかけとなった。

課題としては、分校に在籍する児童生徒の実態や人数等が常に変化する中で、外部に求められたテーマでの研究を実施してくことの難しさを感じている。

（４）研究授業

ア　成果について

研究授業を実施することは、教職員一人ひとりの力量を高めるうえで不可欠なことである。本年度も研究授業に取り組んだことで、他の教職員の授業から、児童生徒の実態の捉え方、発問の仕方、効果的な教材づくりと提示の仕方等を学ぶことができ、良い点を積極的に授業に取り入れていく姿勢が見られたことが成果と考える。

また、研究授業を行うことにより、同じ子どもであっても教科や授業者によって違う一面が見られ、児童生徒理解につながった。子どもの実態を別の視点から見ることで、異なるアプローチの仕方に気づかされることもあった。研究協議での意見交換は、発問の仕方や、教材の工夫すべき点等、各教職員が次の実践に活かすためのものとな

り、困難な状況であっても研究授業を行った成果と言える。

そのうえ、教職員一人一人の課題も見つかり、解決のために今後の取り組むべきことが明確となった。

イ　課題について

1 学期は、在籍する児童生徒がいたものの入院期間が短く、研究授業の設定をする前に退院してしまった。また、病状が重いために登校しての授業ができない状態の子どもたちである等から、研究授業の実施は難しかった。２学期になり、継続して登校できる児童生徒が出てきたため、何とか研究授業を設定し実施することができたが、それぞれの子どもたちにそれぞれの場所で授業を行う状況があり、分校の教職員全員で一つの研究授業を参観することはできなかった。

年度当初から計画的に進めたかったが、児童生徒の在籍が不確実な実態や在籍していても授業ができない等の難しい現状があった。

４　おわりに

今年度は、平成２５年度から三年計画で「発達障害のある子どもの授業づくりと、そのための教材・教具の工夫を行う」ことに取り組んだ二年目であった。平成２６年度も発達障害があると診断されており、かつ長期に在籍した児童生徒はいなかったため、発達障害のある子どもを対象とした継続的な研究はできなかったが、各教職員が一人ひとりの児童生徒の実態を考慮した授業づくりに励むことで、発達障害のある子どもが転入した場合でも、その子どもに応じた授業につながると考え、今年度の研究テーマ「一人ひとりのこどものニーズに応じた授業づくり」に取り組んだ。

分校の授業は、個別で行うことが多いため、同じ児童生徒であっても他の教科の時間にどのような学び方をしているのか、また、授業者が変わることで子どもの学び方が変わるのかどうか等、客観的に見る機会があまりない。そこで、研究授業を設定し授業改善に取り組むことが、発達障害やその傾向のある児童生徒を含むすべての子ども一人ひとりが、分かりやすくかつ主体的に学べる授業づくりにつながると考える。

来年度は、最終年度に当たるが、発達障害がある子どもが在籍するかどうかは分からない。しかし、類型Ⅱ型の生徒も含め、発達障害のある子どもを含む全ての児童生徒の実態に合わせたユニバーサルデザインの教材・教具の工夫や分かりやすい授業づくりに取り組んでいきたい。